

地域における高齢者及び障害者 疑似体験を導入した教育方法

古 田 あき子

An Educational Method for Simulated Practice by the Elderly
or People with Physical Disabilities

Akiko Furuta

．はじめに

介護は人間の尊厳を基本とし、対象者が自信を持ち、安心してその人らしく生きられるよう生活そのものを支援することである。介護の実践者である介護福祉士に強く求められるものは「相手の立場に立ち、相手を思いやる豊かな人間性」である。平成10年6月に中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会は「社会福祉基礎構造改革について」の中間報告で、介護従事者の養成目標として「福祉サービスに必要な専門的な知識・技術の習得だけでなく、権利擁護に関する高い意識を持ち、豊かな感性を備えて人の心を理解し、意志疎通をうまく行い、相手から信頼される人の育成を目標にする必要がある」と報告した。これを受けて平成12年介護福祉士の養成カリキュラムが改訂され、介護技術・形態別介護技術に関して授業時間がそれぞれ30時間増加した。追加・強化された内容は「コミュニケーションに関する内容」「福祉用具の概要と活用方法」「利用者の立場、自立支援の視点での介護技術」「介護過程の展開」であり、対象者の生活像をとらえる視点が強調された。一方、平成12年文部省高等教育局の大学における学生生活の充実に関する調査研究会は、学生の実態を次のように報告した。将来の職業や具体的な学習内容について明確な自覚を持たないまま「自分探し」のために大学へ入学してくる。また核家族化・少子化の進展により幼少期から人との関わりや実体験を得る機会が乏しく「人とうまく付き合えない」「無気力」など様々な問題を抱えた学生が増えている。本学の学生も同じ傾向にあり、中・高等学校同様にクラス単位の授業であっても相互交流の場が少なく、同級生の名前全ては分からないことも事実である。日頃から積極的にお互いを知ろうと努力をしない学生たちは、他者の思いやおかれていく状況を考える機会も稀になってきている。このような背景を持つ学生が専門的な技術を修得していくためには知識を受け取るだけでなく、学生が主体的に学習に参加できる授業の工夫が必要と考える。そこで、対象者の実情に少しでも近づき、個別援助ができる視点を身につけさせる方法として高齢者・障害者装具を着用し、自らの五感を使って一般生活者の感覚で学ぶ疑似体験学

習（以下体験学習とする）を地域で実施した。

・研究目的

この研究では形態別介護技術の授業で行っている、学外での体験学習の有効性について検証することを目的とした。

形態別介護技術は他の専門科目と並行して、1年次後期から2年次後期までの1年半で行われ、順次学習が深められるように位置づけられている。形態別介護技術（2単位60時間）では障害を持つ対象者（高齢者・障害者・障害児）を理解し、それぞれの特殊性に応じた介護を実践できることを目的とする。1年次後期では福祉用具の理解・使用方法及び介助方法を学び、視覚障害者・聴覚障害者・運動機能障害者の学内における疑似体験を行い、体験レポートを課している。形態別介護技術（1単位30時間）では特に内部障害・精神障害・知的障害に起因する介護について理解を深め、保健医療関係者との連携について理解する。形態別介護技術（1単位30時間）では高齢者・障害者が社会と接点を保ち、残存能力を生かした生活が可能となる自立支援に基づいた介護技術を身につける。さらに、家族支援のあり方や社会的介護のあり方について理解することを目的とする。2年次後期に高齢者・障害者の学外における疑似体験学習を行い、体験レポートを課して報告会を行っている。体験学習の目標は 老いや障害を地域で体験し、思い、心身の

表. 1 地域疑似体験授業計画

回数	学習項目	ねらい
1回目	講義 1. 目的、目標について 方法及び諸注意 2. グループ編成・体験スケジュール 表作成について 3. 体験後の報告レポートについて 報告会の方法について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の目的・目標が理解でき、学生が主体的に学習行動がとれるようにする
2回目	グループ活動 ・ 地域での疑似体験報告会の資料作り	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々人での学びをグループ全体の学びにできるように、意見を出し合う場とする ・ 理論・概念を活用しグループ学習の成果を論理的にまとめる ・ 発表方法の工夫をする
3回目	クラス・グループ活動 ・ 地域での疑似体験報告会 司会・進行は教員が行う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告会を、体験学習の発表体験の場とする。また、他者の意見を聞く姿勢を身につける ・ 共有学習の場とする ・ 振り返りをするすることで、次の学習課題を明らかにする
	* 疑似体験の実践は、各グループが講義の空き時間に行う	

苦痛、快、不快を感じ取る。福祉専門職としての地域社会における介護福祉士の役割と責務を理解し、対象者に必要な援助を洞察する。体験したことを既習の知識・理論・概念を使い検証し、介護を追求する態度を身につける。グループ活動における人間関係の相互作用について理解を深めるとし、学生に提示した。体験方法はグループ活動とし、学生にグループ編成・体験学習実施計画を作成させ、計画書に基づき実施した。(表1)体験学習時は、高齢者体験装具(装着することで80歳の世界が体験できる)や片麻痺体験装具(左・右上下肢運動機能障害が体験できる)を着用し、車椅子を使用した。対象者と介助者両方の役割を体験することを条件とした。2年次後期に体験学習を行い、終了後は体験レポートを課し、グループ内での学びをまとめ報告会で発表させた。

・研究方法

体験学習終了後、報告レポートの記述部分を抽出し、体験学習の4つの目標に沿って分析し学習効果について検討した。

・結果

結果は表2の通りである。体験前、学生は高齢者に対する知識として、身体機能の衰えによる動きづらさ、視力低下や視野狭窄などにより外出することはいやだろうと考えていた。そのため介護者は段差や周囲の状況に配慮し、注意深く行動するとともに、相手への情報提供を密にする必要性について考えていた。「学内で演習や車椅子体験をしているので、地域での体験学習は特に不安を感じていない。」「友達がいるので協力し合って何とかなると思う。」など表3にある学内での演習及び体験が安心感となっている。その反面、学習した知識・施設実習での体験はあるが、実際に地域での体験がないため対応に不安のある学生も見られた。介助される側になったとき、周囲からどのように見られるか、周囲の視線が気になったり、車椅子のため入店を断られるのではないかという不安を抱く学生もいた。体験学習から学んだ内容について図1に示した。目標1に対しては、既習の知識で分かっていたこと、分かっていたと思っていたことを実際に体験することで、心身の苦痛や思い、生活のありようが実感できた学生は全員であった。体験装具を着用することで、自分の日頃の身体活動に負荷や行動制限が加わり、バスや車への乗降では高すぎるステップを前に一生懸命足を上げてても届かず、やっと届いても片足に重心をおくことができず結局人の手を借りることになった。見えにくさ・聞きづらさは、本当に不便で自分のことを言われているのが不安になり、仲間はずれされたような気持ちになった。見えない・聞かないことは心理面でも視界が狭くなり世界がとても狭く感じ、話しかけられても介助者に視線を合わせてもらえないと強い不安を感じた。このような状態が毎日続くと、無気力になり、表情も暗くなるといった等、身体的な苦痛が精神面に影響することに気づき、社会的な関わりが減少することを実感した。また、体験前交通機関を利用する時、周囲の状況に対応できるか不安を持っていたが、電車乗車時は混雑している車両は乗車しづらく、人混みを避けるように空いている車

表. 3 演習及び体験学習項目

専門分野	演習・体験学習内容
介護技術	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活支援：移動、移乗（車椅子、ストレッチャー、体位変換） 食事の介助 身体の清潔（入浴・衣類の脱着） 排泄の介助（オムツ体験、トイレ・ポータブルトイレの介助、便・尿器の介助）
介護技術	<ul style="list-style-type: none"> 観察：バイタルサイン コミュニケーション 事例に基づく介護課程の展開
形態別介護技術	<ul style="list-style-type: none"> 視覚障害 聴覚障害 言語障害 四肢運動機能障害 <p style="text-align: right;">移動・歩行・コミュニケーション の体験</p>
形態別介護技術	<ul style="list-style-type: none"> ストーマ設置者の介護
形態別介護技術	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者・障害者の地域での疑似体験

両を選び乗車した。車内では人々の目つきが刺すようで、少しでも早く下車したいと感じた。このことは他の学生も車内だけでなく、人に依存する体験をすることで周囲の人々の視線や態度がどのようなものであるか実感し、人の視線・目は暴力にもなり、周囲の配慮のなさは肩身の狭い思いをさせることを実感した。当たり前なことにも「すみません」「ありがとうございます」など口をついて言葉が出た。常に頭のどこかに、他人の迷惑になっているのではないかという思いでいたこと等がレポートから読みとれる。目標2に対しては、体験の学びから対象者の状況に応じて介助方法を工夫できた学生は54%であった。また、介護福祉士の役割については、バリアフリー、ノーマライゼーション等講義での知識を地域で体験することでつらさや悲しい思いや怒りを感じ、自分の目で現状を知ることによってその重要性を認識でき、介護福祉士としての役割を理解できた学生は47.4%であった。学生は対象者体験から、介助者になった時には体験を生かし、声かけははっきりと大きな声で対象者と視線を合わせて行うことや、ボディタッチする援助を行うことで安心してもらえることを実感した。また、今回は信頼できる友人に援助を依頼したが、見知らぬ人に自分の身を任す際、心の不安が大きいことを認識して介護にあたらなければならない重要性を実感した。体験前は、段差や階段は協力して何とかできると考えていたが、駅の階段を大人4人で車椅子を持ち上げてもらった時、車椅子の傾斜が急で怖く、「大丈夫よ」といわれても安心できず、実際友達であっても不安であることを実感した。駅で介助者が駅員に介助を依頼に行き、一人残されたとき「早く戻ってほしい」と強く考え、その時間はとても長く感じた。また、なるべく人目に付かない隅にいき、顔も壁側に向けて目を合わせないようにした。駅員が来てくれたが車椅子の扱いが間違っていたため、車椅子ごと転落するのではないかと恐怖心を味わった。そして駅員から「駅には障害者用の設備はないので駅にいけないの？」と介助者に向かって言ったことが、直接自分に言われてはいないが冷たい言葉と態度に怒りを感じ、強い

ショックを受けた。一般の方に援助を求め断られた時も同様に強いショックを受けた。学生は、日常生活をしている時には気づかなかった場所で不便を感じ、多くの障害にぶつかった。通路の狭さ・商品の高さ・位置・配置によって手が届かない。スロープはあるが、傾斜が急なために一人では使用できない。歩道では視覚障害者のための点字ブロックも車椅子利用者にとっては振動が強く適さない状況であり、さらに点字ブロック上に自転車の放置・ゴミの放置など様々な障害があることを学生の目で確かめていた。病院で体験した学生は、建物が古く構造上様々な使いづらさによる障壁は、ボランティア、看護師等で障壁をカバーしていることを学び取っていた。学生は体験を通し改めてバリアフリーの大切さを認識するとともに、心のバリアフリーの重要性を学び取っていた。また、ユニバーサルデザインの普及や地域環境の整備と維持が重要だと思っており、車椅子が快適に安全に町を動ける環境整備は、高齢者や視覚障害者、子どもたちのためにもなると考えていたことがレポートから読みとれた。目標 3 に対しては、報告会を行うために、体験学習の計画・実践・評価のプロセスを通し、自分たちの行ったことを振り返ることの必要性について理解している学生は10.5%と少なく、ほとんどの学生が理論や概念を使って論理的に検証し文章化するまでには至っていなかった。目標 4 に対しては、体験発表では、学生がグループを編成し活動することで、主体的に学習することやチームワークの大切さ、それぞれの役割を認識し責任ある行動をとる必要性を感じているが、レポートにはその記録がなく読みとれなかった。

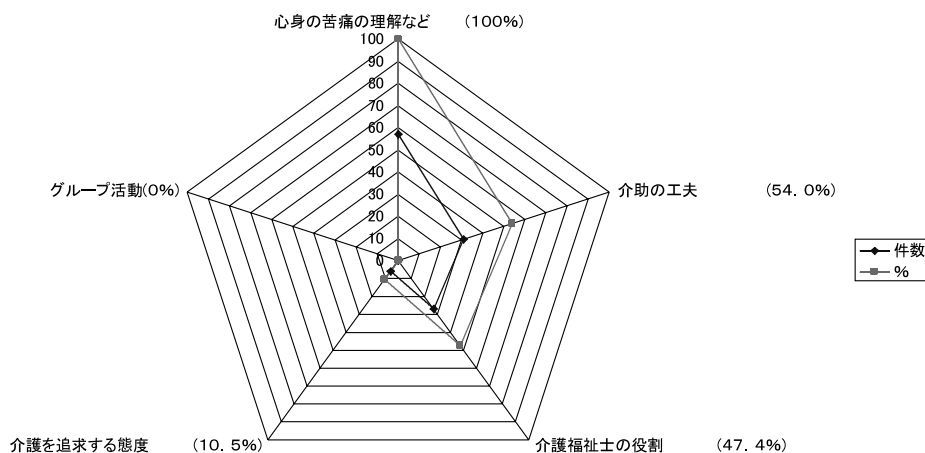


図 . 1 疑似体験で学べた内容 (n=121)

・考察

体験学習は、自らの身体やこころ、知能・感覚などすべてのものを駆使し学習することで“知る・わかる”レベルから相手の状況に気づき“実感できる、実際に感じて理解できる”レベルに到達でき学生が主体的に学べる学習法である。¹⁾

地域での体験学習の結果を見ると、目標 1 に対して良い結果が得られている。これは茂野が「患

者―看護者の役割を相互に入れ替わりながら演じたり、行動変容を求める人・求められる人の立場になって感じる・考えるという体験をすることで患者の存在をより身近に感じ、より現実感を高めることができる」²⁾と述べているように、体験者装具を着用し車椅子を使用したこと、地域社会にでることで周囲の対応や態度、視線で学生は介助を必要とする人に成り切り、高齢者・障害者のおかれている状況や心身の状態を体感し気づき、考える体験をしたことで理解につながったと考える。また、体験からの学びを援助方法として活用できた学生が54.0%であったことは、対象者のおかれている状況を体験したことから介護を洞察することができたと考える。講義形式の授業で得る知識は瞬間的な記憶であるが、実際に体験することで創意工夫するレベルに達し内在化した知識となり得る。教員は学生の創意工夫が対象者にとって安全で安楽な介護技術で科学的な根拠を有するものかを、評価・分析しながら教授する役割がある。体験学習実施時には、他者の手を借りることや地域の環境状況から学生自身が事故に遭遇する危険性もあるため、連絡方法や体験方法について他職員との連携を図っていく必要がある。

目標2に対しては、現実を見て体感したことは、介護の役割は施設内だけでないということのイメージ化はできている。しかし、目標3と関連した論理的表現については、今の学生の傾向として文字離れも大きく影響していると考えられる。しかし、介護福祉士にとって記録は避けて通れないものである。日頃の授業の中で、レポート課題の積み重ねや文献活用の方法についても指導していく必要がある。また、報告レポートから学生は体験学習を報告することや体験学習の計画・実践・評価のプロセスを通して行ったことを振りかえる姿勢が必要であることを意識している。報告会では学生の多くがポスターセッションの形式をとっている。ポスターセッションは資料を読むだけでなく、ポスターを見ながら説明が要求されるため内容を正しく把握していなければ発表できない。そのためにグループでの意見交換も活発になる。ポスターの表現、プレゼンテーションも他のグループに負けないためにそれぞれ工夫を凝らしている。また、他のグループの発表を聞くことで体験しなかった学びを共有学習でき、効果的な発表方法についても学ぶことができた。報告会はクラス別で行っているが、他のクラスの発表を聴きたかったという学生の声も聞かれ、この姿勢が介護を科学的に追求する素地を創るものと考えられる。

目標4に対しては、学生が自分たちでグループを編成し活動することで、主体的に学習することやチームワークの大切さを学んでいる。さらに、地域に出ることで責任ある行動の必要性の重要性を実感していると考えられる。事前の協力依頼が必要となる、公共交通機関では車椅子介助の補助を利用する月日・乗車時間・乗車区間を連絡する必要があるが、この一連の流れの中で学生は初めて他機関の職員と関わりを持ち、連絡の重要性について体験した。計画を実行し結果を得るためには、周囲の目があり羞恥心を感じている学生もそれぞれの役割を果たすことができた。グループ編成から報告会までの計画立案・実践・評価のプロセスは、社会で介護福祉士としてチームの一員として実践する場合、役割を認識し計画的に行動していくための学習と考える。体験学習は個人で行うより数人のグループで行ったほうが効果的であった。相手の反応やフィードバックから自己の気づきがなかった点に対して他者から気づかされ、自分自身を見つめる機会ともな

っていた。

介護教育において、アセスメント能力に加え、問題解決に向けての実践力の育成も重要である。そのためには体験学習を導入することにより介護実践に必要な洞察力が育成できると考える。

・ 結論

1. 講義やテキストだけの画一的な学習だけでは理解が不十分な内容（情意領域）については体験学習が有効であった。
2. 学生は、体験学習を通して高齢者・障害者のおかれている状況などをより多く実感することができた。
3. 体験学習は多くの学習効果が得られる反面、時には他者の手を借りることや環境条件から事故につながる危険性もあり、学生と教員及び他職員との連絡を密にする必要がある。

・ おわりに

最近の入学生の傾向として、人との関わりや生活体験が乏しく、他者との関わりやコミュニケーションの苦手な学生がいる。彼らが主体的に学習する方法として、高齢者・障害者装具を着用し自らの五感を使い、地域に出かけ一般生活者としての感覚で学ぶ疑似体験学習を地域で行った。その結果、学生は対象者のおかれている状況を理解し援助の工夫ができた。体験装具を装着し体験学習を行うことは、対象者の実態に近づき、個別援助ができる視点を身につけさせる方法として有効になったと考える。体験学習では多くの学習効果がある反面、学生のレポートにもあったように他者の手を借りることや環境条件から事故につながる恐怖感を味わう場面に遭遇することさえある。体験学習の利点を強調するあまり、ややもすれば不利益な面が見失われがちである。今後は学習の主体者である学生への配慮を十分にしようとして学習の方法・範囲を考えた体験学習ができるよう検討を重ねていきたい。

最後になりましたが、査読者の助言に感謝いたします。

引用文献

- 1) 藤岡完治他：わかる授業をつくる看護教育技法3，医学書院，133，2000
- 2) 茂野香おる：総合的学習を可能にする科目デザインに取り組む，看護教育，42（4），281-285，2001

参考文献

- 1) 中川幸子：学生が主体的に学ぶためのロールプレイの試み，看護教育，42（4），287-289，2001
- 2) 松村三千子・松浦妙子：成人看護学授業における疑似体験学習の重要性—片麻痺患者体験と対象者理解の関係—，看護教育，43（2），129-133，2002

- 3) 鈴木純恵・太田澄恵・永野光子：看護教育の教育方法に関する研究動向と今後の課題 2
演習・体験学習等に関する研究に焦点を当てて、看護教育, 35 (11), 891-895, 1994
- 4) 佐藤弘美他：老人理解のため体験学習, 看護展望, 18 (8), 32-36, 1993
- 5) 大沼幸子：学生の主体的学習を引き出すグループ学習とポスターセッションを導入した授業
展開の実際, 看護教員と実習指導者, 1 (3), 15-21, 2004
- 6) 菊池麻由美他：学生の実践力を高める授業の工夫 - 清潔の授業について -, 看護教員と実習
指導, 1 (3), 22-29, 2004
- 7) 大盛り武子他：行動姿勢を育てる学習の場をどう設計するか, 看護教育, 39 (6),
441-444, 1998
- 8) 伊藤和子：介護福祉教育における疑似体験の意義と方法, 愛知江南江南短期大学紀要
第31号, 47-64, 2002
- 9) 木場富喜：看護基礎教育における情意教育の今日的意義, 看護展望, 18 (8), 18-21, 1993
- 10) 梶田叡一：高度な専門職にふさわしい教育をさらに模索すべきである, 看護展望, 24 (5),
22-26, 1999
- 11) 宗像困恒次：いまなぜ体験学習か, 月刊ナーシング, 11 (49), 24-27, 1991

〒489 - 8086 愛知県江南市
高屋町大松原172番地
愛知江南短期大学
社会福祉学科